



1979年(昭和54年)

2月号(No. 404)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

北アルプスで会った人々

—教えられた貴重な山の文献二つ—

大木 操

大正二年の夏、上高地清水屋で私ら一高山岳会登山隊の一行が、ウェストン氏に叱られたというエピソードについて、最近の会報三九八号で御披露したのであるが、その話の出所は会員佐藤眞氏の著書からであって、念のため同氏に取材の根拠をお尋ねしたが要領を得ることが出来ず、私が戸惑った旨も併せて記述しておいた。

ところが昭和五十三年九月中旬に会員山崎安治氏から、ウ氏に叱られた話の真のルーツである貴重な文献の御教示にあずかり、私の全く知らなかったことだけに一方ならず感激した。その上コピーまで頂くといいお手数をかけ厚く御礼を申上げる。

その文献というのは、昭和十年一月梓書房発行の雑誌「山」第二巻第一号に、会員山口成一君が河童橋上のウェストン氏夫妻の写真説明のため寄稿した「ウェストンと嘉門治」という一文である。この筆者の山口君こそ、一高登山隊の同志として私と終始行動を共にした山仲間であるから、これほど確実な証言は外にはないわけである。これで佐藤氏の取材根拠も明確になり一件落着、私は満足感で胸一杯になった。

左に山口君の文献をご参考までに再録する。

『ウェストンと嘉門治』

山口 成一

大正二年八月一高山岳会(一高

北アルプスで会った人々

—教えられた貴重な山の文献二つ—

- (大木 操)……………(1)
三ツ峠岩登り競技会を見て……………(3)
(鈴木郭之)
ブラヴァンド氏の山案内手帳(3)……………(4)
(岡沢祐吉)
図書紹介……………(4)
3冊の初登頂記
SIVALAYA
越中山座図巻
東西南北……………(8)
報告……………(9)
お知らせ……………(10)
会務報告・ルーム日誌・会員異動……………(10)
カット/梅谷隆一

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開設時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

旅行部の前身)の登山隊は、創始者の一人である大木操氏に率ひられて中房温泉から燕、常念、槍を経て上高地温泉へ投宿し解散コンパを催した。駄菓子、煎餅などが出たと思ふが、何しろ二昔も前の上高地だから向ふにあったものか、こちらから持って行ったものか判りつきりしない。誠に粗末な御馳走で、その理合はせと言ふわけでもなかったらうが随分賑やかに騒いだ。

さうしてあるうちに、まだそんなに遅くはない、多分九時前だったと記憶するが、突然障子の外の廊下に声があつて

「奥様明日山へ登ります。皆さん山を愛します。静かにして下さい……」

云々といふ人がある。至極尤もな申込みに、一同一斉に首を縮めて鳴りをひそめた。宿の者にきいてみると、ウェストン氏夫妻が槍ヶ岳登山のため嘉門治等を連れて翌

日早朝温泉を出発すると言ふことであつた。日本アルプスの開拓者の一人、ウェストン氏の風貌に接するのは甚だ興味深いことである。

翌朝時刻をはからって河童橋の袂に待ち受けてみると、ウェストン氏を先頭に夫人、従者及び嘉門治の一行がやって来た。大木君が早速進み出て氏の写真を撮したいことを申出たところが、直ちに快諾、橋上にて一行を指揮して並べ、

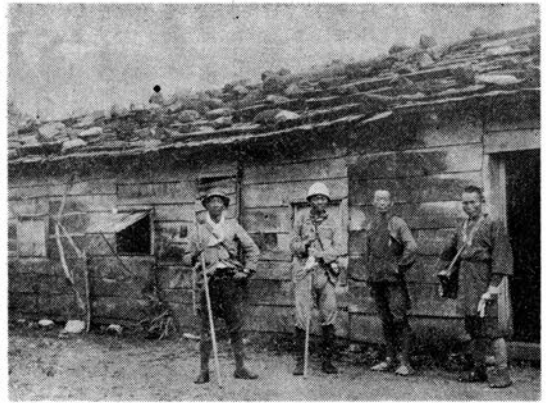
自らはシャツの袖をまくり上げ腕を組んだと思ふと、ぐつと穂高の方を眺める姿勢をとった。西洋人は中々芝居気がある。そのとき撮った写真がこれである。

ウェストン氏は登山靴の上に草鞋を穿いてゐた。夫人のスカートの下はニッカーで、歩くときには

山をきれいにして「三」は持ち帰る

(注) この文献についてただ一点残念なことは、原本冒頭の書き出しが「大正十二年八月」と重大なミスプリントで始まっていること、これは勿論「大正二年八月」の明らかな誤りであるから、この点に限り原本訂正の上再録してある。

(編集注) 「山」三九八号掲載



白馬岳下山の途、蓮華温泉にて。左より大木操、山口成一君、強力、強力（大正2年8月14日撮影）

を折る。

歴史的な邂逅

―田部・木暮氏らと―

今では日本アルプスの表銀座といわれる燕、大天井、常念の稜線を、一高山岳会登山隊第四班の総勢十七人（内案内、強力八人）が、無人小屋に油紙と着草座を敷いてのゴロ寝で三日目の夜を赤沢の岩小屋で過ごすまで、人っ子一人にも出会わなかったという恐ろしい程の静寂極まる大自然の中を悠々大行進した。それもその筈、今から六十五年も昔の大正二年八月初旬のことであった。

古い岳友山口成一君（会員番号五〇〇）とは、このあと上高地を去ってから私と二人だけでさらに白馬岳登山を試み、頂上の無人小屋で暴風雨に襲われ強力共四人で乏しい食糧を分け合いながら、三日三晩の籠城を頑張り通した揚句、蓮華温泉へ脱出したという懐かしい思い出がある。このように親しかった岳友とも、卒業後は職場違いでほとんど交遊の機会に恵まれずにいたところ、山口君はこの貴重な文献を残したまま昭和十七年の晩秋、五十一歳の若さで果なくも他界されてしまった。それにつけても山口君よ！ 真に大切な山の史実であるこの話を、よくも書き残しておいてくれた。ほんとうに有り難う！ 謹んで御冥福

まで、人っ子一人にも出会わなかったという恐ろしい程の静寂極まる大自然の中を悠々大行進した。それもその筈、今から六十五年も昔の大正二年八月初旬のことであった。

八月四日は先ず槍ヶ岳頂上を究めてから、その日のうちに上高地へ辿り着こうという日程なので、岩小屋を早朝出発七時過ぎには槍の大雪山溪の上部まで喘ぎながら登って行つた。恰度その時である。この山旅で全く最初の四人連れの一行（外に強力二人）にバツタリ出会った。すくく物珍らしかった。摺れ違いざまに懐かしい挨拶を交わし合った時、その中の一人が上に行ったら「北を見給え！ どうもはや神秘的です！」と、い

とも快活に言い残してサッサと雪渓を降って行つた。こういう記録は私の手許に以前から残ってはいしたが、その摺れ違った四人連れが一体誰々であったのか、今の今まで一切知る由もなく打ち過ごしてきた。ところが最近の昭和五十三年の六月、この時の一人の名前を明確に証明している貴重な文献を教えられ、私は跳び上らんばかりに驚喜した。この文献の提供者は会員中村純二氏であり、その原本は大正八年六月発行の会員田部重治氏著書『日本アルプスと秩父巡礼』である。私はここに中村氏に対して厚く感謝の意を表した。



槍ヶ岳雪渓をゆく一高山岳会一行。最後の黒服は案内者の横沢頼蔵（大正2年8月4日撮影）

田部氏著書中の「槍ヶ岳より日本海まで」によれば、田部氏は木暮理太郎氏と二人だけの山旅で、大正二年八月三日会員茨木猪之吉氏ら別の一行と相前後して上高地を出発、その日の午後遅くそれぞれ槍ヶ岳登頂を了え、その夜は二組とも窮屈な思いをこらえて仲良く殺生小屋に泊り、翌四日朝、田部、木暮両氏は西鎌尾根へ向い茨木氏一行は上高地へ戻ったという詳しい経過が記述されている。

朝赤沢小屋を立つたのだという。私は愈々肩から鎌尾根目にかけて下りかけた……と記載があり、私ら登山隊と田部、木暮両氏とは肩の上で出会い挨拶を交わしていることが立証されている。まことに興味深い発見である。



濃霧中の三の窓雪渓をゆく。左端は案内の佐々木助七、林蔵と強力 (大正3年7月25日撮影)

七を頼み、当時未開拓であった三の窓から剣頂上への新ルート記録を作ろうとの野望を抱いて同月二十五日決行したが、三の窓頂上鞍部まで追い上げたところで不運にも天候悪化のため遂に断念という苦い体験を持っている。
そういう因縁深い難コースを翌

三ツ峠岩登り競技会を見て

鈴木郭之

昨年八月二十六、二十七日に日山協主催による第二回岩登り競技会が山梨県三ツ峠で開かれた。各地の学連で選抜された三十一名の選手が参加、定められた岩場を、

いかに早く、安全に、規定通りに登るかを競うのである。
この競技は本会理事田村俊介氏(当時日山協理事兼任)を中心として昨年中アルプス宝剣岳天狗

年見事に踏破した両先輩の健闘ぶりを、この文獻によりて具さに知ることが出来て、私はその功績を心から讃えたいのである。

霧が濃く退ました木暮氏とは学生時代何度もお会いしたにも拘わらず、日本山岳会長の頃は私が職務柄山に疎遠だったため、全然御無沙汰に打ち過ぎたこととをこの上なく悔んでいる。復活入会後会報で木暮翁前祭のあることを知ってまことに懐旧の情に堪えない。遙かに金山平の木暮翁の碑に向って合掌して筆を擱く。

岩で始めて開かれたもので、この種の競技はソ連のクリミヤで世界各国から選手が参加して毎年開かれていたことは衆知の通りである。今回は、丹部節雄日山協副会長のもと、高橋善教氏が競技委員長、田山勝氏が審判委員長(以上の各氏、本会会員)によって運営された。

ルートは三ツ峠屏風岩中央カンテ、高度差70メートル、登攀距離90メートル、平均傾度75度。取りかかると3メートルがホルドのほとんどないかぶり気味のところで、フリクションで越さなければならぬ第一の難関で、この上の第一バンドを抜けてさらにクラックを登ると右にトラバースをする場所に出る。このトラバースは、ホルド、スタンスがなく、体を宙にほうり出されるような感じでへつらなければならぬいやな場所。第二の難関である。トラバースのあとV字ロックにルートをとるようになる。さらに岩溝を登りピナクルを越すとチムニー状の登りとなる。この辺になると息切れと、手足が動かなくなり、まさに気力で頑張り、登りつめると決勝点である。

第一日 大会会長の挨拶、競技委員長、審判委員長の説明のあと、審判委員長より審判の説明がある。採点はゴール地点までの登攀時間と、その間登攀技術にミスのあった場合、マイナス1点を3秒と換

算して登攀時間に加算してきめられる。最初に山岳同志会の今野和義氏と大宮求氏がデモンストレーターとして見事な登りを見せる。次に各選手に一回だけの試登が許された。どの選手も平均約四分弱のペースで全く安定して登る。やはり最初の三メートルの壁が問題で、ここをスムーズに登った選手は、精神的にも比較的問題なく登ってゆくようだ。長野県選出の松本山窓会の鈴木伸司選手が遂に3分台を割って喝采を博した。

第二日 無風、快晴の絶好の日



和、いよいよ今日が決勝戦だ。どの競技もそうであろうが、やはり決勝戦となると、昨日の試登の時と違って固くなり、思わぬミスも出て来る。そこへゆくと東京勢は地元のアレンデとしての慣れもあり、3分台の好成績を出した。最初からファイト満々の大阪勢のうち、泉州山岳会の西村晶選手が、3分13秒6という好成績を出し、この頃より俄然各選手が闘志をもち出した。結果は昨年二位の山岳同志会の和田昌平選手がひととき

わ目立ったテクニクで登り、2分46秒2のタイムで優勝、第二位は、同じく山岳同志会の、アンナブルナ峰や、ジャヌー北壁で活躍した坂下直枝選手が2分49秒0、第三位には、やはり東京のエスカラード山岳会の白石一良選手が2分53秒4のタイムで入り、この三人が十月にソ連クリミヤで開かれた78年国際岩登り競技大会の出場権を得た。

第一日目に2分台の最高記録を出した長野の鈴木伸司選手は、自己の記録が精神的な負担になってか、登攀前から固くなり、ついに登攀中考えられない場所ですリップした。一度登攀を中止しようとしたが、続行の指示のもと、かけるようにして登り、それでも2分58秒8の素晴らしいタイムを出した。しかし残念ながら、判定の結果失格となった。精神的な影響を如何に強く受けるかという事実を如実に示した一つの事例だった。たまたま隣のアレンデでは、多くの人がザイルとビンでビレイされて、遅々として一般ルートを登っていたが、競技の行われていて、より難しいV字ロックルートを選手達が全くのフリーで、かけるように、しかし全く安定して登ってゆくのは対照的であった。登山行為の中にはタイムを持ち込むことに対し、異論のある方もおられようが、タイムは決して究極的なものでも、絶対的なものでも

なく、タイムを競うことによつて、一つの目標が出来、その目標に到達、あるいは更新することによって、技術が向上するのである。そして岩壁を早く登ることは、それだけ安全なのである。

近年、スキーマの用具と同じく、岩登り用具も目立って改良された。そしてその相乗作用による登攀技術が飛躍的にのびたことは事実である。こうしたことから、よい意味での、岩の恐怖感から脱却することが出来、一つの精神革命までになった。かくしていままで全く登攀不可能と思われた岩壁に登攀可能にし、かつ、早く安全に登れるようになった。これを実際に公けの場に示したのが、昨年の宝剣での第一回岩登り競技会であり、今回の三ツ峠での競技会であった。

毎年行われるクリミヤでの国際岩登り大会でも、二年毎にモンテ・ローザで行われる登山と山岳スキーを組合せたスキー・アルピニズム国際大会も、タイムを競いこそすれ、その目的は、より早く、より安全にある。この両大会で、ある成績をあげるには、残念ながら、我々は、体力的にも技術的にも未だであるが、いつの日か追いつけるものと信じる。こういう意味においても、日山協がこの種の競技会を催した意義を大きく評価しなければならぬ。今後の一層の活躍を期待したい。



図書
紹介

3冊の初登頂記

——東部カラコルム——

一九七五年、テラム・カンリ七四六四m(静岡大学)、一九七六年、シンギ・カンリ七二〇二m(東北大学)、シエル・カンリ七三八〇m(神戸大学)。

これまで、カラコルムでの日本人による主要登山記録は、京都大学による「チョゴリザ」・「サルトロ・カンリ」と「K12峰遠征記」、東京大学による「バルトロ・カンリ」と「キンヤン・キッシュ」の五冊にすぎなかった。

そこへ、今回一挙に三冊が加わるようになった。大変喜ばしい。それも試登すらされたことのない処女峰の登頂記というのだから申し分ない。

「テラム・カンリ」(静岡大カラコルム遠征隊編、静岡市大谷三八、五十三年五月十二日発行、A4判、二二一頁、写真三六頁、

ブラヴァンド氏の

山案内人手帳(3)

岡沢祐吉

松方三郎氏の山行

「p. 76~77

IV. den 28. Juli: Strahleggthütte—Gr. Lauterhorn über Lauteraargrat u. zurück über Strahleggpass.

den 29. Juli: Strahleggthütte—Gr. Schneekorn u. Abstieg über Andersongrat—Nassjoch—Lauteraargrat—Gleichenhütte.

Es wäre vielleicht überflüssig über die Eigenschaften von Herrn Brawand als ein Führer zu schreiben. Weil viel Touristen schon gut und recht geschrien haben. Er war zwar immer ganz vorsichtig und ganz tapfer, und ich konnte immer nach ihm ohne geringste Umruhe folgen. Ich bin mit ihm ganz zufrieden und kann ihn deshalb bestens empfehlen.

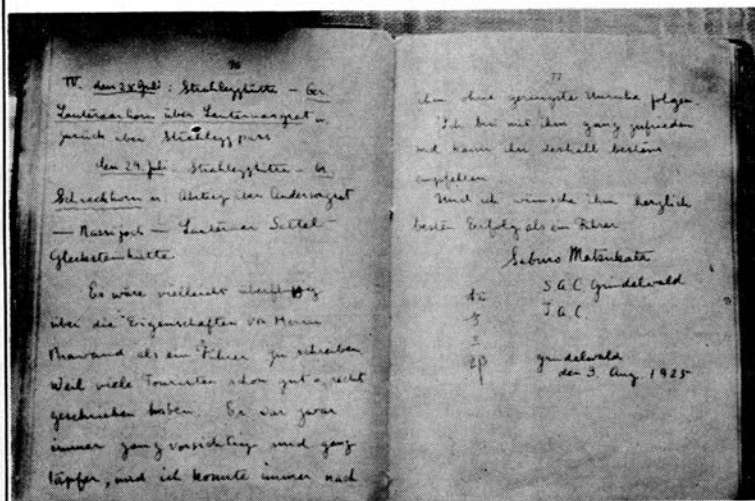
Und ich wünsche ihm herzlich besten Erfolg als ein Führer.

松方三郎 Saburo Matsukata
S.A.C. Grindelwald
J.A.C.

Grindelwald den 3. Aug. 1925.

七月廿八日シュトラールエグヒュッテ——ラウテルアール稜經由グロースラウテルアールホルン。帰り、シュトラ

76~77 ページ、松方三郎氏の筆跡



ールパス經由。
七月廿九日シュトラールエグヒュッテ——グロースシュレックホルン。下りはアンダーソン稜——ネスイヨッホ——ラウテルアールザッテル——グレックシユタインヒュッテ。
山案内人としてのブラヴァンド氏の特性について、書く必要は恐らくないだろうと思えます。というのは、すでにもう多くの客が、上手に、正確に書いているのですから。
本当にいつも周到で、勇気があり、彼についていると、まるで不安というものがありません。

内カラー四頁、定価三五〇〇円)

一九〇九年、英国の著名な探検家T・ロングスタッフ博士によって発見、命名されたこの山を、静大隊は一気に陥し入れた。

往路、キャラバン開始からBC設置まで四十一日間という長丁場のアプローチ、アジア大陸最大のシアチェン氷河を越えた最初の日本隊である。

登頂に成功した時、登攀隊長が「頂上に足跡はないか」とトランシーバーで聞くくぐりは面白い。中パ国境線上にあるテラム・カンリを北面から中国隊が登っているとの情報が入っていた。

「シンギ・カンリ一九七六」(北大カラコルム遠征実行委員会編、仙台市片平一の一、五十二年十一月一日発行、A4判、二七四頁、カラー写真一五頁、白黒写真多数本文中に挿入、定価三〇〇〇円)

ヒマラヤ初陣の東北大が見事な成功を収めた。興味深く読ませる報告書である。発行は早く、五十二年度の年次晩餐会の入口で買求めた記憶がある。

すばらしいカラー写真を数多く配し、本文も無味乾燥なこれまでの公式報告書の形や内容を越えて、幅の広い読者層を対象に、軽妙な表現で、本文中に多く配したモノクロ写真も効果的である。ある意味で、この種の報告書と

しては近年まれにみる出来ばえといつてよからう。何もかも収録したという雑多感がなくもないが、かえってそれ故に、特に、これからカラコルムを目指すという人達には見逃せない報告書の一つといえる。

「コンダスの女王 シエルビ・カンリ」(神戸大カラコルム遠征隊、平井一正編、神戸市暮合区八幡通四の一、神戸新聞出版センター刊、五十三年五月二十五日発行、B5判、三三〇頁、カラー写真八頁、白黒写真多数本文中に挿入、定価三五〇〇円)

この本は自費出版ではない。ということは何らかの商業上の制約を受けている。内容はおのずから一般向にならざるを得ない。しかも、その範囲内で書きたいことを表現するとなれば、レトリックを用いるしかない。編者にそういう意図があったかどうかは知らないが、全体としては成功しているようにみえる。

二六歳でチョゴリザのサミットとなり、三〇歳でサルトロ・カンリにも参加した隊長平井一正は、故酒戸弥二郎をして、くくものように岩壁を登るAACCK随一の強靱な男」といわしめたのであるが、四十四歳、寄る年波には勝てないといえる。随所に、体力の低下を嘆いている。

しかし、平井の真骨頂はもはや

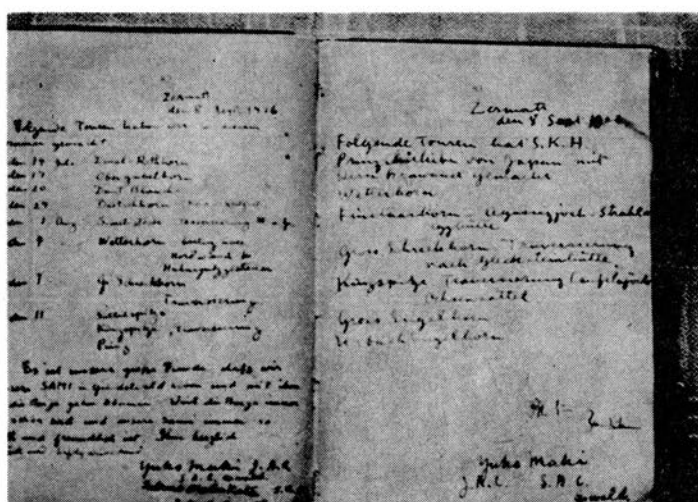
ん。私はすっかり満足しています。そんなわけで、私は彼をいちばんに推薦します。彼が山案内人として優れた成果をあげられるよう心から祈ります。

SAC グリンデルヴァルト
JAC
松方三郎

一九二五年八月三日グリンデルヴァルト

この年の松方さんの記録のうち、七月二十八日より前のは、七月十五日のヴェッターホルンから七月二十三、二十四日のエンゲルヘルナーまでの山行である。

ラウテルアール稜からラウテルアールホルン



82 ページ (左)

に登り、シュトラールエグパスを回って、ヒュッテへ戻るルートは、SACクラブフェーラーによると素敵な登攀ができるとあるが、急稜で櫛の歯のような尾根は、所々難易度六級のコースとなり、現在ですら熟練した客が依頼するのでなければ、ガイドは案内しないようである。

横、松方氏の山行

p. 82

Zernath
den 8. Sept. 1926
Folgende Touren haben wir in diesem Sommer gemacht.

den 14. Jul. Zinal-Rothorn

den 17. Jul. Ober gabelhorn

den 20. Jul. Dent Blanche

den 24. Jul. Bietschhorn (Nord-West-grat)

den 1. Aug. Simelstock-Traversierung

kl. u. gr.

den 4. Aug. Wetterhorn Abstieg über

Nordwand bis Hühnergut-

gleischer

den 7. Aug. Gr. Schneehorn

Traversierung

den 11. Aug. Sattelspitze

Kingspitze, Traversierung

Prinz

Es ist unsere grosse Freude, dass wir

unsern Sami in Grindelwald haben und

mit ihm in die Berge gehen können.

Weil die Berge immer so schön sind

und unser Sami immer so nett und

freundlich ist. Ihm herzlich Glück und

Erfolg wünschend.

Yuko Maki J.A.C.

体力にではなく、AACKで育った精神にこそある。

一処女峰をきわめることは、本質的に他の一般の登山とは異なったものを持っている。エベレストも、いったんその頂上がきわめられたあとは、多くの遠征隊がやすやすと登っている。なぜだろう。それは、こわさはあっても未知というおそれがなくなったからであらう。

初登頂というものは、他のスポーツと異なり、永久に更新されることのない記録として登山史上に残る。それはまた、未知の世界に挑んだ人間の精神的な記録でもあり、人の心をかきたててやまない——と彼の登山哲学を披歴すると同時に——山での死というものが、いかに社会を騒がせ、肉親を嘆かせ、登山そのものの意義をも失なわせる、むなしいものであるかを膚で感じていた。この遠征隊の若者達全員を無事に連れて帰ることが、至上命令であった——と体験からにじみ出る登山感をのべる。

この平井のフィロソフィーがどういう意義を持つのか、地球上に魅力的な処女峰がすくなくなつた昨今とはいえ、この精神は失ってはなるまい。そして、この土俵の中で人間のドラマを報告しようとして試みている。出来ばえは、少しビューティフルにすぎるくらいはなくてもない。

これら三冊の報告書はいずれも苦心と工夫の跡がうかがえて有益である。
(山本良三)

SIVALAYA

—8000メートル峰の
編年誌と文献—

ヒマラヤの八〇〇〇メートル峰に的をしぼった本では、手近かに深田さんの『ヒマラヤ登攀史』(第二版・一九六九年刊)がある。またイタリアで一九六四年に刊行されたマリオ・ファンティン(編著)の『ヒマラヤ巨峰初登頂記——八〇〇〇メートル峰一四座』の題で邦訳(一九六九年刊)されている。ここに紹介するルイズ・C・ボームの『シヴァラヤ』も八〇〇〇メートル峰一四の登山史に限った本だが、副題が示しているように探検・登山の編誌と参考書目を中心据えた点がとくに注目される。

一見、資料がいっぱいでも無味な書物のように見えるが、著者の行きとどいた工夫によって、レファレンス・ブックとしても役に立つと同時に、それぞれの八〇〇〇メートル峰についての、初期の踏査にはじまり一九七七年に至る各国登山隊の成果が年代順に簡略に記

—ブラヴァンド氏の山案内人手帳(3)—

S.A.C. Grindelwald
Saburo Matsukata J.A.C.

S.A.C. Grindelwald
ツェルマット

一九二六年九月八日

次の山行がこの夏おこなわれたものである。

七月十四日 ツィナール・ロートホルン

七月十七日 オーベル・ガーベルホルン

七月 廿日 ダン・ブランシュ

七月廿四日 ビーチホルン(北—西稜)

八月 一日 ズイメルシュトック—クライン

八月 四日 ヴェッターホルン 北壁を降りて

八月 七日 グロースシュレックホルン縦走

八月十一日 ザッテルシュピッツェ、キングジ

ュピッツェ縦走

殿下

グリンデルヴァルトに僕らのザミを持っていくこと、彼と一緒に山に行けるということは大きな喜びだ。山はいつもとてもすばらしいし、僕らのザミは大変気持よく親切だから。彼の幸せと成功を心から念じつつ。

榎 有恒

J.A.C. S.A.C.

グリンデルヴァルト

松方三郎

J.A.C. S.A.C.

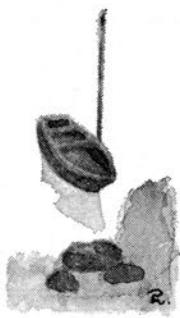
グリンデルヴァルト

一九二六年、松方さんはグリンデルヴァルトからツェルマットに出て、後年アイガー、ラウパルトを開いた山案内人グラウフェンの家に、麻生、松本さんと泊り、さらにこの三人に鹿子木員信、渡辺八郎の両氏に加わってスキーを楽しむ(会報三四八号、三七六号)。ザース・フェーからイタリア国境近では麻生さん、ガ

イドのヘルマン・イムゼンクが松方さんと行動を共にする。この年の五月、榎さんもスイスに入っており、秩父宮殿下のスイスアルプス登山の準備が着々と進んでいたようである。八十二ページ榎さんと松方さんの署名が入った記録の日付は、次ページ雅仁親王の署名がある日付と同じである。場所も同じツェルマットであることを考え、「山岳」にある渡辺八郎氏の記録を思い合すと興味がある。「九月八日の夜、長い間お伴した案内人全員をホテル前の喫茶店に招き、その労をねぎらわれた。その夜彼らは各自の案内者手帳を出し、殿下の署名を乞うた」。その一人であったブラヴァンド氏もこの手帳を出したのであらう。この時いっしょに書きこまれた八十二ページの記録、八月十一日のところに「殿下」とあるが、殿下の到着されたのは十二日なので、この記録が書きこまれた時点での殿下を意識し書かれたものと思う。七月十四日のツィナールロートホルンも十七日のオーベルガーベルホルンも現在の地図などと違った綴字であるが、当時の表記によつたものと思う。七月二十日ダン・ブランシュまでの山行はヴァリスの山々であるが、七月二十四日からはペルナールオーバーラントへ移る。渡辺八郎氏の記録によると、榎、松方、渡辺さんがグリンデルヴァルトで落ち合ったのはこの頃になる。ビーチホルンの北から西尾根へ縦走するルートは当時一般にとられたルートで、一八五九年から一八六七年にかけて開かれていた。ここへの取り付きの起点、SACヒュッテ・バルトシードルクラウゼに入るまで、ローヌの谷から歩きで七乃至八時間かかる。またそのせいかこのころの日本人登山者に、このコースは好まれなかったらしく、榎さんと松方さんのとった逆コースを後年田口一郎、二郎両氏がとった外、こいらい辺には記録らしいものが見当たらない。榎さんが登

されているので、通読してもなかなか面白い。そして、編年誌では、それぞれの探検・登山について、著者が依拠した原資料を番号で記し、その番号を原資料表で見ると出典が明記してある。さらに、その出典の刊行年とか、新版とかについては、巻末の文献目録を探せば、著者別にすぐに分かる仕組になっている。

例をマナスルの項に採ってみると、位置、経緯度、標高、初期測量記号、山名由来などを記した後、現在入手可能な地図のリストを掲げた上で、編年誌の記述がは



じまる。カンチエやエヴェレストと違って、探検史としては新しい方なので、例の一九五〇年に行なわれたティルマンによる観察、同年ハーゲンによる西南側からの航空撮影などにはじまり、一九五二年以降の日本隊の遠征、登頂を詳しく年代順に列記する。一九五五年の西堀、成瀬両氏のカトマンズ訪問なども含まれ、七一年の西壁隊、七四年の女性隊などの登頂ももちろん記録されており、それぞれの記述の出典を見ると、日本隊の活躍についてはマナスルの公式報告二冊、依田氏の「マナスル写

真集」のほか、各隊のヒマラヤン・ジャーナルやマウンテン・ワールドなどへの寄稿が挙げられており、各誌の所載ページも明記してある。従ってマナスルに関する他のパーティの報告などを探す場合など、たとえばアメリカン・アルパイン・ジャーナルの何年版の何ページと、即座に分かる仕組となっている。

巻末の文献目録にも、なかなか工夫をこらした跡が見られるので、この著者ボーム氏とは如何なる人物か知りたくなるが、カパーに記されている紹介文によると、旅行家としての足跡が広く、極地探検家でもあるという。そして登山、極地探検等に関して英国では屈指の蔵書家だと記されているから、本書は、その個人ライブラリーを活用した成果だと思われる。

SIVALAYA: The 8000-metre peaks of the Himalaya. A chronicle and bibliography of exploration by Louis C. Baume, Gastons-West Col. 1978. 316 p. (島田翼)

越中山座圖巻

越中山座同定
グループ編

珍しい本が出版された。富山平

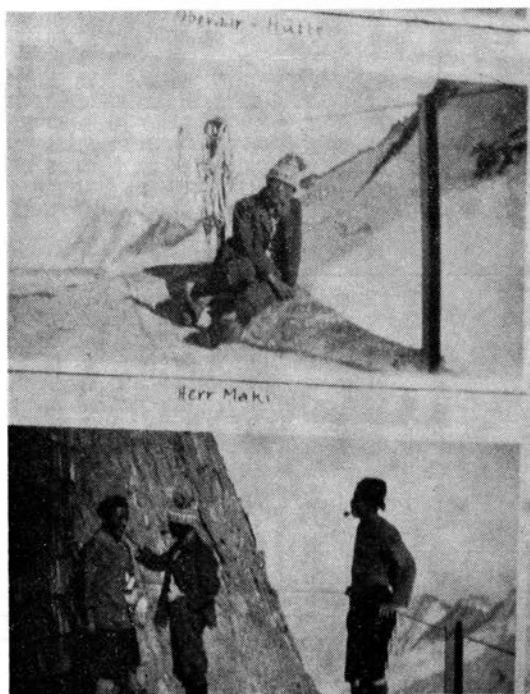
られたアレッチホルンも、オーベルアレッチ氷河を経由しているからロース谷のメレールあたりから入られたのだろう。この地域一帯には、途中他に見られないビヴァーク用の岩穴があったり、小さな礼拝堂があったりして、グリーンデルヴァルトやツェルマットとは違った山城となっている。

七月二十四日のピーチホルンは西稜からレッチエンタールに降り、夕刻グリーンデルヴァルトに戻り、渡辺さんと落ち合ったものと思う。

八月一日、グリーンデルヴァルトに松本重治氏も到着、頼さん、松方さんはこの日エンゲルヘルナーに登り、八月四日には松本さん、渡辺さんを加え、ヴェッターホルンに登り、北壁を経て西側にあるヒューネルグッツ氷河へと降りている。シュタイグアイゼンをつけず氷壁を降り、初めて本当のアイゼンの使い方を教わったと松方さんが書いているヴェッターホルンの北

壁がこの時のものと思う。渡辺さん、松本さんの署名がないが、エミール・シュトイリの手帳に書かれてあるのかもしれない。この時の様子を一部ブラヴァンド氏が話してくれたが、初めてアルプスへ登った人々にとって、大分きびしい山行であつたらしい。八月十一日はエンゲルヘルナーのザッテル・シュピッツェとキングシュピッツェの縦走となっている。このようにして山案内手帳の記録をみてくると、エンゲルヘルナーもそれぞれのピークに登るごとにその名が記入されているようで、山案内手帳に記入されていないものには登っていないとも言えそうである。

(今回は秩父宮殿下、渡辺八郎氏ら)



(上) 横 有恒氏 (下) 左から松方、横、渡辺氏



ヒラリー氏を迎える

ヒラリー氏を迎えて西堀会長が挨拶(通訳・佐藤テル氏)したのち、記念品(クラブタイ)を贈呈、三田幸夫、吉沢一郎、折井健一氏ら旧知の人々や青懸の若いメンバーと懇談、写真のモデルやサインなど忙しい時間を過ごしたのち、午後八時すぎ、NHKへ向かわれました。

杉本 良氏からの便り

去る十二月十九日夜、エドマンド・ヒラリー氏を本会ルームに迎えました。同氏はNHKの招きで来日、植村直己氏との対談録画など忙しい日程の間をぬって本会の招きに応じられたものです。当夜は、青年懇談会主催の忘年会がおこなわれており、名物のおでんをつつきながらなかなか一刻を過してゆかれました。



当日のヒラリー氏と佐藤テル氏(写真/小倉厚)

第、謹んで御礼申し上げます。私は田舎百姓の癖、当時一高に進学しました。明治三十九年、ウォーター・ウエストン時代、偶々信州出身の黒沢とか岡部とか云うのが、しきりにウエストンをふりまわしまして、寄宿舎の夜昼、

盛んに吹聴されたのでした。私の同室は関口泰君、これが山好き、静岡でしたので、大井川の話。当時の山は小島島水、高頭諸氏の本式の山岳家、一高では山川とか辻村とか、この人達は二部(工科)でして、私はとうとうおあいせずに終りました。この人達のは本式で、写真機もあり、テントの装備もあつての山登り、私共はもうもうお粗末千万、それで野営仮泊式のアルプス本式は及ばないが、地もとの大無間、黒法師となつて、関口と誇りあつての、あの山登りとなりましたのでした。が、この時、関口君が山岳会の高野さんにもあつたり、山岳会の講演会と云うのに参りまして、田代川の清流を話題の講演を伺つたりして、夏休みあの登山となったのでした。夏休みの紀行を静岡民友新聞に出して貰つたのですが、村長鈴木祐一氏は山の中の村長だったのが新進、チンパだのに馬に騎つて、騎馬富士登山をしたと新聞に持てはやされた名物人でした。今日では千頭も大発展しましたが、明治末期はまだまだ川下りも出来た時代でした。あの山を折角「山岳」誌上に御披露賜りましてから、大正昭和時代私は、朝鮮は白頭山に大

がかりの登山をしました。台湾はどうとうあまり登れず、その後内地帰還後は五十年に近くなりませんが、ここに俄然「山岳」誌上で七十年前のあの記事の御披露に接しまして、九十老人腰をのばしてすっかり若い気持ちになりまして、大に大に意欲をそそられます。

それにしても山岳会の御発展、真にお芽出度、お祝い申し上げます。何卒今後も愈々益々御発展の程御期待申し上げます。(昭和五十三年十二月二十七日)

JACノミの市

宇津 力雄

中河与一先生宅から帰りつくなり電話あり、「感想文をお願いします」集会委員の池田さんからだ。「JACには文筆家が多いのに、どうして私が」。「当日相当数買いこんだのが宇津さんだからせひ」とのこと。身から出たサビ、承知するハメになった。ノミの市と同じような部類に交換バザーがある。幼稚園から大学にいたるまで現在流行化してきている。この種の催しの悩みは、モノが集まるか、またそれがさげられるかということ、その点で担当者苦勞するのはどこも同じであるらしい。

東 西 南 北

野から眺めた越中の山々のスケッチとその山名を明確にして一本にまとめたものである。下新川郡八善町青木、魚津市友道、富山市本郷町、同母橋北町、婦負郡婦中町音川、砺波市本町、高岡市街南郷本橋、氷見市中田の八ヶ所から北アルプス北端を遠望したスケッチ集で、湯口康雄、佐伯邦夫、盛一雄、橋本広、広瀬裕一、和田健、谷村文平、菊川茂、伊藤了一、広瀬誠の各氏によりスケッチされ、それに山名が解説されている。

巻末に広瀬誠氏による「山岳大観」、水野透氏による「県東部における山容の変化」の二篇が付され、その理解を深めている。

私などいつも富山平野は素通りで、たまに晴れた朝など列車の窓からかすかに望む程度だが、折りがあればゆっくりこの冊子と頭つきで越中の山々を眺めてみたい。

十一月月中旬千寿ヶ原の文部省登山研修所へちよつと出かけた帰り、富山駅で列車の時間が少しあったので富山城の天守閣に登ってみたところ、剣岳方向にぶつかつたような広告塔が出現しており、すっかり山を隠してしまつてた。まことに残念だったが、この本は後世に越中の山名を残す貴重なものと思う。

広瀬氏は小生あての私信で、スケッチが山に理解のない画家の手になったため思う通りのものにな

第21回紅葉会

石間信夫会員案内の健脚向童頭山コースは女性ばかり、主力

11月三水会

ヨーデルとワインのタベ

今井友之助氏からおくられたワイン、その銘柄も「モンセルヴァン」で乾杯のあと、坂本正智氏のヨーデルの歴史、地域性のお話をうかがって、舌と耳による鑑賞にはいった。ヨーデルは坂本氏の「独断と偏見」によって選曲されてテープに録音されたとのことだったが、見事な配列。早くからルームにきて準備にあたった坂本氏や長田さんの手になるオールドブル風のおつまみが底をみて、ワインの空ビンがテーブルに林立する頃、ヨーロッパプスの郷愁を呼びおこすヨーデルの歌声は上気した談論に消されがちだった。9時に開きとなったが、名残りを惜しんで二次会に散る人が多かった。時、53年11月15日。

(菅野弘章)

△出席者▽広羽、沼倉、高田、
長田、加藤（節）、門井、坂本
（正）、関塚、林（桂）、勝田、
浜田、宇津、栗原、菅野、小林
（重）、石田、進藤、斉藤（健）、
杉山（都）、網倉、山崎（安）、
斉藤（桂）、隈部、中川（恵）、
岩堀、坂倉。

一東西南北

昭和五十三年九月、北日本新聞社出版部発行、九〇ページ、定価二四〇〇円。
(山崎安治)

報
告

第三七四回小集会

ノミの市結果報告

去る10月28日開催されましたノミの市の収支結果が出ましたのでご報告いたします。

- ・ 出品者数 七二名
- ・ 出品点数 五一八点
- ・ 売上総額 四九二、五四〇円
- ・ 出品者返却 三八一、二八〇円
- ・ 必要経費 七四、五八〇円
- ・ 残金 三六、六八〇円
- ・ 寄付金 二七、一四五円

(詳細は実行委員会にお問合せください)

北海道支部だより

北海道支部忘年会は、十二月二十三日（土）午後五時三十分より札幌の中村屋旅館で開かれ、本年次のペテガリ岳、西堀会長、今西前会長来道や宮城支部との交流等歓談の中から報告があり、佐々先

生のヒマラヤ・スライド映写があり来年はぜひヒマラヤ遠征とのうれしい注文があった。

△出席者氏名▽渡部盛夫、金井五郎、横田春雄、平野明、朝比奈英三、兼平治水、大塚武、柳田涼子、浅利欣吉、山川力、宮下弘、赤石喜恵子、亀井秀子、大音師忠一、井手貴夫、高沢光雄、佐々保雄、新妻徹(出席順敬称略)

お知らせ

山岳図書を語る夕

53年度の「山岳図書を語る夕」を左記のとおりおこないます。

日時 3月8日(木) 18時30分

場所 本会ルーム

講師 近藤等氏

フランス語圏の山の本について豊かな知識をお持ちの近藤等氏をお招きして、山の本についての楽しいお話をうかがいます。お誘いあわせのうえ、ご来会下さい。

(図書委員会)

昭和53年入会のみなさまへ

オリエンテーションのお知らせ

昭和53年度新会員を対象とするオリエンテーションを開催いたします。当日は会長、副会長をはじめとし、各委員会担当理事が出席し、説明にあたる予定です。新会

員のみなさまに、日本山岳会を理解していただき、山岳会で大いに活躍していただくために、このオリエンテーションをもうけました。ふるってご参加下さい。新会員以外の方も自由にご参加下さい。

なお、オリエンテーション後、親睦会をおこないます。

日時 3月24日(土) 午後2時～4時

場所 日本山岳会ルーム

会費 五〇〇円(親睦会)

第21回登山技術講習会

これから本格的な登山を志す初中級の方を対象にした積雪期登山の基礎技術を中心に、懇親の意味を含めて残雪期の谷川岳で講習会をおこないます。男女を問わず多数ご参加ください。宿泊設備の都合で、申込み受付は三十名に限りまですので、ご了承ください。

日程 昭和54年5月18日(金)～21日(月)

場所 谷川岳成蹊大学虹芝寮と芝倉沢

行程 5月18日夜各自虹芝寮集合 5月19・20日 技術講習会、毎夕ミーティング 5月21日 ミーティングの後午前10時頃解散

講師 ヒマラヤをはじめ海外登山の経験豊富なメンバーを予定、講習生3名に講師1名の割合で指導にあたります。

会務報告

12月理事会

(12月4日午後6時30分 本会ルーム)

▽出席者 西堀会長、望月、折井各副会長、高遠、小倉、中川、橋本、大森(欠)、鈴木、黒石、越田、牧野内、嵯峨野各理事、浜野、山崎、金坂、小原各評議員

委任 宮下、田村各理事、片岡監事、近藤評議員、中島委員

▽議案

・ヒラリー卿を囲む会開催の件 (高遠)

12月19日午後6時より、本会ルームに於て、青年懇談会の忘年会と合同、有志で懇親をはかる

了承

・昭和54年度年次晩餐会会場の件 (高遠)

広い会場を確保するためには、早く予約する必要があるため、会場を決定すべきである。

昭和54年12月1日(土)、会場を京王プラザホテルとする。

承認

▽報告事項

支部長会議報告

山研 (折井)

山研 (小倉)

春先と閉所時期の利用者は少ないので、開所5月初旬、閉所11月初旬とする予定。

指導 (嵯峨野)

・指導

2月10日～11日、吾妻の慶応の小屋を利用、スキー講習会開催

・学生

ニルカント遠征の件、インドと交渉中

・図書

山岳史懇談会、2月15日

山岳図書を語る夕、3月8日

・海外連絡

UIAA総会の報告 (鈴木)

・自然保護

11月30日各大学リーダーとの懇談会開催、環境庁自然保護局長出席

・集会

11月19日現地小集会(甲州高尾山)。12月17日もちつき大会。

1月13日～15日スキー懇親会(岩岳スキー場)。

・婦人

パミール行き希望多い。

・高所登山

11月11日高所登山研究会

(金坂)

～79・夏は《7月6日(金)～7月20日(金) 15日間》

ソ連・カフカスの山旅

- ◎エルブルース山(5,633m)登頂(希望者)
- ◎夏山アルペンスキー
- ◎氷河と花の小旅行、その他多彩ノ

※カフカスはレールモントフなどロシア文学の郷里です。

＝ソ連の山と旅の専門旅行社＝

(株)日ソ旅行社

政府登録一般第98号

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-20-1
電話 404-1751(代) 担当:石元広昭

案内書呈

ルーム日誌

(11月)

1日(水) 青年懇談会
8日(水) 婦人懇談会研究会
13日(月) 海外委員会
14日(火) 婦人懇談会委員会
15日(水) 三水会
16日(木) 図書委員会
17日(金) 学生部
20日(月) 指導委員会
21日(火) 婦人懇談会研究会
27日(月) 書評委員会
28日(火) 婦人懇談会
30日(木) 自然保護委員会
今月の来会者 四九一名

▼会費を納めてください

52年度の会費未納の方がごく少数ですがおられます。53年度分とあわせて至急お払いこみください。除籍になってしまいます。

▼原稿をお寄せください

「山」は会員相互の連絡、親睦、対話の場です。研究、随想、紀行、報告等、フレッシュな原稿をお寄せください。

昭和五十四年二月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 大森久雄

電話東京(03) 四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所

株式会社 技報堂